

練馬区子ども読書活動推進会議(第12期第三回)要録

日時：令和6年8月1日（木） 午前10時から12時10分まで

場所：光が丘図書館2階視聴覚室

●参加者（敬称略）

出席委員：林、木村、熊丸、工藤、相澤、坪倉、内田、中村、降籬

欠席委員：遠藤、慶野

事務局：小原光が丘図書館長、
押田子供事業統括係長、同係 和田、塚越、大塚、根本
教育指導課 菅原サポート人材推進係長、高橋指導主事

その他：傍聴人1名

●議事等

1 開会

2 議題

- (1) 第四次練馬区子ども読書活動推進計画の取組状況について
- (2) 練馬区子ども読書活動推進計画（第五次）の検討状況について

検討項目 ①基本目標

②地域でのアウトリーチの方策

③日本語を母語としない子どもへの読書支援

④経済的な支援が必要な世帯の子どもへの読書支援

3 その他

読書に関するアンケートの実施について

4 閉会

【配付資料】

資料1 練馬区子ども読書活動推進会議第12期委員名簿（令和6年4月1日時点）

資料2 令和6年度「第四次練馬区子ども読書活動推進計画」取組実施状況調査

資料3 「第四次練馬区子ども読書活動推進計画」計画指標の達成状況

資料4-1 練馬区子ども読書活動推進計画（第五次）の策定について

資料4-2 現行計画との比較

資料4-3 練馬区子ども読書活動推進計画（第五次）の概要

資料5 計画策定スケジュール

資料6 読書に関するアンケート

資料7 読書に関するアンケートの集計について（途中経過）

●会議要録

○事務局

開会に先立ちまして、新年度になりまして、事務局職員に変更がありましたので、自己紹介を行います。

お暑い中お集まりいただきまして、ありがとうございます。光が丘図書館長です。どうぞよろしくお願いいたします。（以下、事務局の自己紹介。）

それでは、資料の確認をお願いします。

（資料の確認）

資料の過不足はございませんでしょうか。また、第四次子ども読書活動推進計画の冊子はお持ちでしょうか。お持ちでない委員がいらっしゃいましたら、お渡しします。

事務局からは以上になります。それでは、座長、会議の進行をお願いいたします。

○座長

本日は、ご多忙の中、お集まりいただきありがとうございます。

ただいまより、第12期 第三回練馬区子ども読書活動推進会議を開催いたします。

事務局から委員の変更および本日の出席者数、傍聴者数の報告をお願いいたします。

○事務局

始めに、委員の変更についてです。資料1をご覧ください。幼稚園から、相澤園長先生。中学校から、遠藤校長先生が新委員になりました。新委員の方へは、席上の委嘱状の配付を持って、委嘱とさせていただきます。

本日の欠席委員は2名です。出席者は9名、傍聴者は1名となります。以上です。

○座長

ありがとうございます。新年度となりメンバーの変更もありましたので、自己紹介を行いたいと思います。

（会議議題に先立ち、各委員が自己紹介を行い、子ども読書推進会議にかかわるきっかけや会議に対する抱負などを共有した。）

○座長

それでは、次第に沿って議事を進めていきたいと思います。

2の議題1、第四次練馬区子ども読書活動推進計画の取組状況について、事務局から説明をお願いいたします。

○事務局

事務局より、議題の説明をさせていただきます。資料2をご覧ください。

練馬区子ども読書活動推進計画 取組実施状況調査についてです。この調査は、推進計画の記載に沿って、練馬区各課での取組状況を毎年調査し、推進計画の進捗を検証するものです。令和5年度の実施状況がまとまりましたので、ご報告します。

まず調査①、各施設での読書活動の状況について、前年度と比較して前進したかどうかを聞き取り、実際に取り組んだ内容や担当者の印象について定性的に示したものです。主だった意見を読み上げます。まず、前進したと回答した施設の主な成果です。学務課では、令和5年度の区立小学校、中学校の図書購入費の当初予算を増額し、蔵書数を増加する取り組みを実施しましたとあります。詳細については予算額等が調査②の7ページに記載がありますので後ほどご覧ください。次に児童館・学童クラブについてです。高学年の子どもたちにも本に興味を持ってほしいと考え、週替わりの児童館職員のおすすめ本を展示するなど取り組んだ。本棚を整理して、古く汚れている本を入れ替えたところ、本を手取る保護者が増えた。昨年度末より、図書館へ本を借りに子どもたちと行き、3か月本を借りて楽しんでいるという意見もありました。続いて保育課です。図書館のリサイクル図書の活用や、保護者等からの寄贈本の受け入れが令和4年度からさらに増加し、子どもたちに様々なジャンルの絵本に触れる機会を提供することができたとあります。地区区民館では、今年度もボランティアや職員による読み聞かせ会を継続して開催した。その結果、着実に認知度、定着率は上がってきている。また、新規に本を購入する際には、月齢に見合った読み聞かせに合う絵本や、リズムボタンを押すと音が出る手遊びの本を選定するなど工夫を重ねた結果、本の貸し出し件数が増加した。とあります。

裏面をご覧ください。続いて課題です。児童館・学童クラブでは、地域の方による読み聞かせ等を行いたいと考えているが、ボランティアを探すのが難しい。という意見がありました。読み聞かせのボランティアを希望する区民は多いものの、需要と供給の面に課題があるということが伺えます。地区区民館では、乳幼児親子の図書の貸し出しは多いが、児童の図書の利用は前年度より減っていた。館だよりでの本の紹介掲載を増やしたが、コロナ明けに伴い活動の制限がなくなり、来館児童の利用目的がレクリームの運動あそびが中心だったため、利用の伸びに繋がらなかったと思われる。来館児童の多くは、コミックを読んで、くつろぐ姿が見られた。児童への蔵書の活用や提供の工夫が課題である。と記載がありました。前年度と同じ取組状況と回答した課は、その下の表のとおりです。後退したと回答した課はありませんでした。

その次の資料2 調査②に関しましては、おはなし会などの実施回数や参加人数などの成

果を、主に定量的に示したものです。細かな情報になりますので、後ほどお目通しいただければと思います。このうち、推進計画の中で目標指標に定めている項目については、別に抜き出して次の資料で記載しています。

資料3をご覧ください。令和5年度実績練馬区子ども読書推進計画目標指標の達成状況です。目標1、乳幼児の読書活動の推進では、ブックスタートの実施回数、おはなし会の実施回数、参加人数が前年度に比べ増加しています。対して乳幼児の図書館の貸し出し冊数は減少しております。表の下の赤字部分を読み上げます。令和5年度のおはなし会の実施回数は、平成30年度と比較すると74%にまで回復しているのに対し、参加人数は36%にとどまっており、生活様式の変化によるものなのか、参加者数の回復が鈍化している。

続いて右側をご覧ください。目標2 小中学生の読書活動の推進では、中学校の学校図書館の本の貸出冊数、本の探検ラリーの実施回数は増加したものの、それ以外の数値は減少しています。小中学校における読書活動推進のための指導計画作成割合は、目標値の100%を達成した。学校図書館の貸出冊数は、令和2年度中に全区立小中学校への学校図書館蔵書管理システムの導入により、集計できるようになった。令和5年度数値は、小学校は前年に比べ微減したが、中学校は増加した。

裏面をご覧ください。目標3、高校年代の読書活動の推進です。高校年代は昨年度に引き続き、貸出冊数が前年度の数値より減少しました。来館者数は増加していることから、図書館の利用の仕方が変容してきているものとも思われます。高校年代の図書館利用を促進していくことが課題です。ただし全国の読書率と比較すると、練馬区の数値はいずれの年代も全国に比べて高くなっています。

続いて目標4 支援を必要とする子どもへの読書活動の推進についてです。障害者等に配慮した資料の点数、それから区立図書館による特別支援学校等への貸出冊数は前年に比べ増加しました。特に特別支援学校等への貸出冊数は、目標値の2,100冊を超過するということになりました。

続いて目標5、読書活動推進の基盤づくりです。区立図書館におけるボランティアの活動回数、人数はともに増加しました。ボランティアの活動回数は直近の7年で最多となりました。活動人数も前年と比べて増加しており、おおむね新型コロナウイルス感染拡大前の数値に戻っています。ボランティアの人数は、おはなし会や布の絵本、探検ラリー等の活動参加者数を示しています。

資料2、3について事務局からの説明は以上です。

○座長

この段階で、資料の内容の確認に限って何か確認したいことがありますか。よろしいですか。では続いて（2）練馬区子ども読書活動推進計画（第五次）の検討状況について、事務局から説明をお願いします。

○事務局

資料の４－１をご覧ください。第五次計画の策定についてです。第四次練馬区子ども読書活動推進計画の成果と課題を踏まえて、さらなる読書活動推進のために第五次計画を今年度中に策定します。策定にあたっては、令和五年度に本会議から提出していただいた提言を踏まえて、庁内の練馬区子ども読書活動推進計画策定検討委員会で検討を進めているところです。１、計画の位置づけです。子どもの読書活動推進に関する法律に基づき、文部科学省が令和５年３月に策定した、子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画の趣旨を踏まえ、区における計画を策定します。第三次練馬区みどりの風吹くまちビジョン、練馬区教育子育て大綱、練馬区教育振興基本計画、これからの図書館構想その他の慣例計画との整合を図っていきます。

２、練馬区子ども読書活動推進計画の策定経過です。令和２年３月に、現計画である第四次計画を策定しています。令和３年３月に、東京都が第四次計画を策定しました。その後、令和５年３月に国が第五次計画を策定し、令和７年３月に練馬区の第五次計画を策定します。以上です。

国の計画では、第五次計画では基本の方針として４つを掲げており、１ 不読率の低減、２ 多様な子どもたちの読書機会の確保、３ デジタル社会に対応した読書環境の整備、４ 子どもの視点に立った読書活動の推進を掲げています。これらを踏まえ、第五次の練馬区の計画でも基本方針を定めていきたいと考えています。第四次計画での主な成果については、乳幼児への貸出冊数の目標値の達成、中学校の学校図書館の貸出冊数の増、小中学校における読書指導計画策定率 100%の達成などがあげられます。課題として、中高生年代の不読率の増、電子書籍の対応、多様な事情を抱えた子どものための読書環境整備が挙げられます。

３、子ども読書活動の推進体制です。本会議では、計画の進捗状況を検証し計画策定に必要な提言を行っていただきました。提出していただいた提言をもとに、練馬区読書活動計画策定検討委員会を立ち上げ、その中で具体的な検討に入っているところです。

４、策定検討委員会のスケジュールについては、後ほど資料５で説明するので割愛します。

５、推進会議からの提言、要旨についてです。ア 自ら学ぶ喜びを知り、探究する姿勢の獲得、イ 誰もが等しく読書に親しむことができる環境の整備、ウ 子どもの視点に立った読書活動とコミュニティづくりの推進となっています。これらを踏まえて、区の基本方針を決定していきたいと考えています。推進会議では、「館の周知物は、不読率が上がる小学校高学年から中高生年代にとって魅力的なデザインを導入していただきたい。グラフィックデザインにも予算をかけていただきたい」というような意見もいただきました。こうした意見も受けて、今後周知物が魅力的なものになるよう、キャラクターの導入なども含めてデザインの洗練化に努めていきたいと考えています。

６、第五次計画の構成についてです。第一章では、読書活動計画の基本的な考え方を示していきます。第二章では、子どもの読書活動における現状と課題として、区を取り巻く状況や、これまでの成果と課題についてまとめます。第三章では、計画の基本目標と取組の体系を記載します。基本目標については後ほど委員の皆様のご意見いただきたいと考えております。

す。基本方針は提言の内容を受けたものとしています。第四章では、子どもの読書活動の推進のための取組としまして、読書活動の場を家庭、学校、図書館、地域の4つに分けて、それぞれの場で実施していく施策とその具体的な取組を記載します。施策の体系については、資料の4-2、4-3をご覧くださいと思います。

資料4-2、現行計画との比較です。現行計画では、東京都の計画に合わせて発達段階ごとに章立てをしていましたが、第五次計画では国の計画に合わせて読書活動の場ごとに記載をしていきたいと考えています。発達段階ごとの記載では、特別な配慮を要する子どもの読書活動の推進、それから読書活動推進の基盤づくりの項目が年代別の観点と少し外れておりましたが、取組の場ごとにまとめることにより、すっきりした体系になるのではないかと考えております。

続いて、資料4-3、第五次計画の概要をご覧ください。ここでは、施策の具体的な取組の一部を、右側の基本方針に基づく主な取り組み内容というところで記載しています。黄色い星印が付いた項目が新規事業です。丸印の番号が、3つの基本方針の番号に相当しています。以前より本会議でもご意見いただいていた、学校図書館の人的配置、図書館の会話可能な時間の設定についても、今後進めていきたいと考えております。

続いて、資料5の策定スケジュールの案についてです。中央の列が、本会議のスケジュールとなっております。第三回の本日ですが、第四次計画の検証、令和5年度各所取組状況についてご報告させていただき、第五次計画のお話をさせていただいております。この後は、11月の第4回に第五次計画素案たたき台の経過報告、1～2月の第五回に、計画案の報告を行います。左側の列は、策定検討委員会のスケジュールになります。6月に第一回の会議を開きまして、第四次計画の検証や第五次計画の策定スケジュール、計画の考え方を検討していただきました。今月は第2回を8月22日に予定しております、第五次計画の素案のたたき台の検討を行い、10月に素案を検討し、その後、第五次計画の案を検討します。計画案を検討する前にはパブリックコメントを行い、皆様からご意見をいただきながらまとめていこうと考えているところです。計画の策定は来年の3月を予定しています。以上です。

○座長

ここで内容の確認に関してのみ、なにかご質問がある方はいらっしゃいますか。よろしいですか。では、検討課題についてご説明をお願いいたします。

○事務局

資料の内容についてご意見いただきたいと思います。特に次第に記載した4点について検討いただけると幸いです。まず①の基本目標について、資料4-3をご覧ください。現在、仮で、第四次計画のものを基本目標に据えております。方向性としては、現行計画を踏襲していくのでよいのではないかと考えますが、少し文章の整理が必要かと思われます。

「子どもたちが本に親しみ、夢や希望を持ち、未来を切り開く力を育む」というところまでが目標で、「発達段階に応じた読書環境の整備」というのは、それを達成するための方策に

あたるということで、目標と方策が一文に含められてしまって少しすっきりしない印象があるかと思います。文言の整理についてのご提案、あるいは次期計画にふさわしい新しい目標のご提案があればいただきたいと思います。

② 地域でのアウトリーチの方策についてです。同じく資料4-3の「IV地域」のところ
で、地域施設での読書活動の推進というところでは、地域施設でのアウトリーチの記載を充実したいと考えています。具体的には、福祉施設や放課後デイサービスなどでの出張おはなし会などを記載するのですが、それ以外に「まちライブラリー¹」への支援を考えています。「これからの図書館構想」のなかで、知識と人をつなげるアウトリーチの強化として、商店街等と連携したまちライブラリーの実施を掲げているところです。民間の事業者等が実施しているまちライブラリーに、図書館としてどのような支援ができるか、お知恵を拝借できればと考えています。

③ 日本語を母語としない子どもへの読書支援についてです。同じく資料4-3のIV地域の、多様な子どもたちへの支援という項目の中で、日本語を母語としない子どもへの読書活動推進を記載したいと考えております。現在は子ども日本語教室への支援として、図書の貸出等を考えているところですが、それ以外の支援として、図書館にはどういう役割が期待されているのかということについて議論いただきたいと思います。

④ 経済的な支援が必要な世帯の子どもへの読書支援です。経済的な支援が必要な世帯の子どもへの支援として、現在は子ども食堂への支援としてリサイクル本の配布や、出張おはなし会、あるいは子ども食堂への理解を深めるための企画展示などを行っています。このほかに経済的な支援が必要な世帯への子どもに対し、どのような支援が考えられるのか、ご意見いただきたいと思います。

以上4点と、それ以外でも意見があれば、委員の皆さんからいただければと思います。

事務局からは以上です。

○座長

子ども読書活動推進計画（第五次）の検討内容についてのうち、1～4について皆さんの意見を聞かせていただければと思います。まず、1の基本目標、文言の整理からまいりたいと思います。基本目標について、目標と方策が混ざってしまっているので、整理が必要なのではないかという検討課題ですが、皆さんいかがでしょうか。

次期計画にふさわしい目標でもよいということですが、第四次計画の目標は、今からは変えない。これは、次の第五次計画のための目標ということではよいでしょうか。

○事務局

お見込みとおりです。第五次計画の目標として、どのようなものがふさわしいかということで、文言の整理や、新しいものを考えていただければと思います。

¹ まちライブラリー 店舗や施設などに本棚を設置し、店主などが所有する本や地域で持ち寄った本を閲覧したり、借りられる仕組み

○委員

目標と方策が混ざっているということですが、読んでいる限り、「未来を切り開く力を育めるように、発達段階に応じた……」と繋がっていくのは自然だと思います。ただ、この「発達段階に応じた」というのは、これまでの東京都の計画に準じた整理に基づいた言葉になっていると思います。第五次計画に関しては、国の計画に準じて活動の場ごとに整理して作られるということだったので、「発達段階に応じた」というところは変えないといけないのかなと思います。

○副座長

「発達段階」というところだけに限定すると、実態と合わないかもしれないが、一方で「年齢とか発達に合わせた」というところは残したい。例えば、「発達段階や生活状況等に応じた」という書き方にすると、幅広くなるのではないかと思います。経済的な支援というところも入ってくるし、それぞれのライフステージに合わせた書き方になると考えます。

文言の整理ということでは、「読書環境を整備する」と変更すると、より目標らしくなるかと感じます。

○座長

事務局にまた質問させていただいてもよろしいでしょうか。この目標の部分というのは、主語は何でしょうか。つまり、区として、あるいは図書館として、練馬区として、ということなのか。子どもたちの成長を支える地域社会全体ということなのか。それによって、基本方針に関しても「姿勢を獲得する」というのは子どもたちや、読書をする人々が主語になっているのに対して、「環境の整備」とか「推進する」というのはもう少し施策というか、行政として、地域として取り組んでいくということになる。主語というか、主体について、どのように考えているのかということがわかると意見が出しやすいかと思いますがいかがでしょうか。

○事務局

第四次計画を見ると、「読書環境を整備します」とあるので、主語としては、図書館を含めた練馬区の地域が環境を整備していくことで、子どもたちの未来を切り開く力を育んでいきます、ということになるかと思います。ただ、ご指摘いただいたように主語が定まっていないというところで、基本方針にも「姿勢の獲得」は子どもが主語になっております。主語を図書館主体ではなく、もう少し広くとらえて皆で作りに上げるということにしていくといいかなと考えます。

○副座長

「練馬区の子どもたちが」という風に聞こえてきたんですが、対象としてはそれでよろしいのでしょうか。

○事務局

練馬区の子どもたちに対して、ということだろうと思います。現計画は区が主体でしたが、国の第五次計画の方針では、もっと「社会として、大人として」という、広い意味で計画をとらえているのではないかと思います。国の計画をなぞらえるとなると、練馬区にお住まいの方に対しての、区役所や図書館だけではなくて、地域における様々な人々が主語になるととらえています。

○委員

「環境の整備を推進する」というのが取組だと考えると、発達段階や生活に応じた環境の整備を推進する、というのを前に持ってきて順番を入れ替えるといいのではないのでしょうか。

○座長

つまり、「発達段階に応じた環境の整備」を先に持ってきて、後半により大きな目標である「未来を切り開く力を子どもたちが育む」を続けると。

○委員

そういう風にしたらほうが、より目標らしくなるかと思います。

○委員

発達段階という言葉の響きには馴染みがないので、子どもたちの「成長」という言葉でもいいかなと思いました。

○座長

そうですね、発達段階というと心理学用語的な感じがしますね。

○委員

「子どもたちが本に親しみ、夢や希望を持ち、未来を切り開く力を育む」というのが最終目標だとしたら、そのために発達段階に応じた読書環境の整備をする。整備をして、子どもたちが育つ、という風に順序が入れ替わると、より力を入れたい目標がわかりやすくなると思います。発達段階というのは、私たちは普通に使っているので特に違和感はないけれども、読書活動の場で計画を整理していると考ええると、少し違うのかなという印象でした。

○委員

目標というところで大きな話をするというのはあると思いますが、本好きじゃない人間からすると、本に親しむことで、夢や希望を持ち未来を切り開くというところが、壮大すぎて

繋がってこない。かつ、本でなくても、ほかの手段で様々なことが吸収できる世の中において、なぜ本なのかというところが目標から見えてこないというところを考えていました。

○委員

「多様性」という言葉が叫ばれていたりするので、「多様な年代に応じた」という表現ではだめなのかと思いました。

○座長

「多様性」というといろんな意味が含まれてしまうマジックワードではあります。その分全てのこともあいまいにするマジックがある。あくまでも目標を掲げるとはいえ、区民のひとりひとりに伝わりやすいような言い回しでもいいのかなと思いますので、皆さんの忌憚のない意見というのは大事ですね。

それでは、次に進めたいですが、よろしいですか。では、地域のアウトリーチの方策というところで「まちライブラリーの支援」というのもありましたが、皆さんのご意見・ご要望等がありましたら発言をお願いいたします。

○委員

まちライブラリーの説明をもう一度いただきたいです。お店などに本を設置するというところだと思いますが、もう少し具体的にお願いします。

○事務局

資料を配布します。（「これからの図書館構想」のP.13の写しを配布。）

まちライブラリーは、店舗や施設などに本棚を設置し、店主等が所有する本や地域で持ち寄った本を閲覧したり借りられる仕組みのことです。群馬県の事例として、薬局に設置された東洋医学の本を中心とした本棚が記載されています。

大泉で、河川敷で若い女性を中心となって自分で持ち寄った本を本棚に並べて貸し出しをしているという話を記事で読んだことがあります。そういった事例を収集して、例えば地図に落として情報を発信するということも考えられます。

○副座長

群馬県の事例が出たのですが、私は夫が群馬県の伊勢崎出身なんです。伊勢崎駅に立ち寄った時に、駅の本棚があって、自由に借りることができるようになっていました。管理がどこまで行き届いているのかわからないし、いい本ばかりがあるともわからないのですが、そういう取組ですよ。図書館ではないところで本の貸し出しをしてもらおうというところですよ。

○事務局

そうですね。地域のみなさんが独自でやっている取組を、図書館が支援したいということです。

○副座長

たとえば、天気の良い日に公園に本を持って行って、子どもたちに読んでもらうということも、このアウトリーチに含まれますか。

○事務局

含まれると思います。

○座長

これは、図書館がどう支援できるか、というお話でしょうか。図書館とつなげる、つながるという形で、例えば図書館の入れ替える本を配るとか、そういうお話なんでしょうか。

○委員

南大泉図書館では、リサイクル本を利用して、近隣の地区区民館や児童館などに持って行って、子どもたちに読んでもらってくださいといって配布しています。貸し出しをするか、その場で読んでもらうかというところは自由です。

○委員

うちの園はカトリック幼稚園なので、クリスマスの本だとか、町の図書館や本屋さんになような本が多くあります。そういう本を、地域の子どもたちに読み聞かせをしたいという話もあります。貸し出ししたりできないかと考えたときに、職員もそこまで手が回らなかったり、管理をどうするか、あまり売っていない本なので、貸し出して帰ってこなかったらどうしよう、と思うと、広く扉を開けたいけれど難しいという話をしています。

○座長

確かに、管理の問題もありますね。全部持って行ってくださいというわけにはいかないですし。運営があくまでもボランティアということなので、負担にならない範囲でどれだけコミュニティに開くかということ、一人一人の善意に寄りかかってしまう気もして、負担のバランスというのも難しいという気がします、他の皆さんはいかがですか。

○委員

「いい本」があまりなかったという発言がありました。例えば薬局であれば専門的な場所ということで目利きがされていると思うのですが、誰がどういう本を置くということによっては、質の確保であつたりとか、誘導されたものが置かれてしまったりすることがある気が

します。ネットでも様々なことが調べられるし、書籍でも偏ったものもあるので、誰が本の質の担保をするのか、責任を取るのか、というところが、いい企画だと思う反面、心配な気持ちもあります。

○座長

個人の読書傾向というのは偏りがあってしかるべきところではあります。それがいろいろなジャンルのマニアックなセクションだということもありかと思いますが、ネット社会と一緒に、一つの引き出しを開けるとそれに関する情報がたくさん出てくるようなことがまちライブラリーでもでてくるのであれば、それはもったいないかなあという気もしつつ。皆さんいかがでしょうか。

○副座長

資料2の、学校の図書館開放に関してですが、私は小学校の図書館開放の指導員もやっています。アウトリーチの話もちろんですが、先ほどの説明で、地区区民館などで読み聞かせなどをしたいけれどもボランティアが集まらないという話がありました。でも、読み聞かせをしたいという人はいっぱいいるという状況なので、マッチングがうまくいっていない。人がたくさんいて場所もあるのに、うまく繋がっていない。まずはそこを繋げていただくことが大事なと思います。アウトリーチで外に出るよりも、まず行政の施設の中で困っているところ、人の紹介をするというところから、子どもの本や物語との出会いを整理していただくほうが、私もアウトリーチに賛成するところもたくさんあるんですが、まずは人と場所のミスマッチのところを図書館でどのようにうまく一致させていくのか。そういうところで子どもたちが本に出会っていくのではないかと思いますがいかがでしょうか。

○事務局

ご意見ありがとうございます。高齢施策の脳活プログラムで、高齢者が読み聞かせの講座を受けることで、ボランティアとしての資格を持つということを実施しているようです。実際にその卒業生の方々がどこで活動するかというところで、なかなか活動の場が得られないという課題があると伺っています。そういうボランティア養成しているところの情報を集約してマッチングするというのは図書館の役割として必要かと考えておりますので、ご意見を参考に検討していきます。

○副座長

もう一つ、図書館開放のところなんですけど、今年度の4月から、立野小学校が図書館開放を始めたんです。図書館開放を始めたいという学校がこの十数年出てこなかったんですが、私は区役所が募集をしないのかと思っていたら、やりたいという学校が1校もなかったから増えなかったという説明を受けました。立野小学校では人がまだ集まり切っていないのでたくさんの活動はしていないようですが、放課後とか長期の休みに、学校図書館を子どもたち

や地域の方々に入館していただけるよう整備をしたということです。これも、大切な読書活動の整備ではないかと思います。今後も、まだ図書館開放をしていない学校が、やりたいと手を上げたら、立野小学校のように、うまく人の配置やいろいろな整備ができれば、図書館開放が増えていくということがわかりました。小学校が65校あるうちの、図書館開放をしていない24校が開放をするようになったら、子どもと本が出合う場所が増えていくと思います。私が知っているところでは、やりたい気持ちはあってもスタッフが集まらないという厳しい条件、問題があるので、何をするにしても、人の偏りがあるというところをどう平らにしていくかということが、今後の子どもたちを支える上で大切になるかと思います。

○委員

豊玉第二小学校では、子どもたち対しては開放しています。例えば豊玉東小学校は、図書館の外部の階段を上って入ることができる。環境的に入りやすいと思うんです。

○副座長

環境などの、大人から見た問題点があっても、子どもが来る場所としてはとても大事だと思います。コロナで3年間活動できなかったり、自分の学校の生徒以外は入館規制があったりしたけれども、今はそれがなくなって、私の活動校は6割くらいの子どもはちゃんと戻ってきています。年2回のお楽しみ会も元通りの姿になっていますので、何かがあればちゃんと子どもたちは来ると思います。

○委員

環境の面では、動線が大事だと思っています。例えば豊玉第二小学校は、生徒さんには開放しています。ただ、一般に開放しているわけではない。一般の方が入るとなると、校長室の前が図書室なので、安全面や管理面でも課題がある。地域の子どもたち全般となると、動線のことなどもありすぐにはできない。一般には開放していなくても、子どもたちに開放しているというところもあるのではないかと思います。たとえば入るときに上履きやスリッパの貸出などの環境のことも考えないと皆さんには開放できない。前にいた世田谷区の学校では、動線を完全に分けた状態で一般の方にも開放していました。図書館にだけ行けるように、ほかの場所はシャッターを閉めるような状態にできる学校だったので、周りに図書館がないこともあり開放していました。安全面などいろいろな条件が整って初めて開放できるのではないかと思います。

アウトリーチというところでは、学校でもたくさん図書館から出張に来ていただいたり、おはなし会などをいろいろな団体の方にやっていただいている。そういう活動をしているということを宣伝していったり、先ほど話に出たように、マッチングを進めていけばいいと思う。前にいた学校では、おはなし会のいろいろな団体がいて、保護者の方が属していたりした。いろいろな団体のおはなし会を、時期を分けてお願いしてやっていました。

○副座長

資料4-3のアウトリーチの充実というところで福祉園や放課後デイサービスに対してというところでは書かれているが、ここ以外に今アウトリーチの先として検討されているところはあるのでしょうか。

○事務局

実際に、今は出張のおはなし会を様々なところで行っていて、保育園、幼稚園、児童館などの施設や、地区区民館や、高齢者施設、地域のお祭りなどに出張しておはなし会をするという事例もあります。計画の中ではそういったいろいろな事例を記載していきたいと思っており、資料4-3では、一例として抜粋して掲載しています。

○副座長

アウトリーチの先として、子育て支援の施設で「子育てのひろば」をいろいろな団体が地域でやっていると思います。ブックスタートで、まずは家で本を読んでもらうというところがありますが、次のステージで、親子連れで外に出るようになった親御さんたちが、地域で行く場所として子育てのひろばを使われる方も多いと思います。そこに対してリサイクル本を配布したり、本を貸出したり読み聞かせをしたりなどすれば、子育て支援の施設へアウトリーチすることができるのではないかと思います。

まちライブラリーについては、今回「子どもの読書推進」というところで考えると、子どもがアクセスしやすいかどうかという点、そこは考える余地があると考えています。

○委員

おはなし会のボランティアの団体をそもそも立ち上げたい、といったときに、どういう手段を踏めばいいのか、登録しなければいけないのか、ということや、ボランティア団体がどれくらいあるのか、参加する手段があるのかというのがわからない。参加しようにもできない、という人もいると思う。

○事務局

図書館で実施しているものでいうと、不定期ではあるが乳幼児向けのおはなし会ボランティア養成講習会を開催しています。これは実際に社会福祉協議会の方に来ていただいて、ボランティアの意義について説明していただいたりします。ここで講習を受けると「ボランティア登録」ができ、各図書館でボランティアを募集していた場合、マッチングして実際に活動される方もいらっしゃいますし、そこで空き状況がない場合でもボランティア待機者ということで登録して、実際に空きが出たら活動していただくという流れになります。

○委員

そうすると、お母さん同士のサークルでおはなし会をしたくても、児童館や学童クラブで

もできないということですか？

○事務局

今お話したのは図書館でやる場合なので、学校や児童館でおはなし会をやりたいという場合は、例えばその方たちでの自発的な学習であったり、図書館のボランティアの方が周りにいれば、どんな形で読み聞かせをするかといったことを教えていただいたりして、図書館以外のところでは、決まりなく活動できると思います。もしボランティアをやりたいということであれば、相談していただいて、どんなことができるか、マッチングできるのかということをお話しできるかと思います。また、そういうご要望が多いのであれば、それも図書館の業務になるのではないかと思います。やりたいと思う方にやっていただくというのがいいと思います。

○委員

例えば、図書館のホームページに、おはなし会をしたい人はこちら、みたいなコーナーがあって、このやり方でボランティアできますよ、どういうところでできますよ、というページがあればいいと思います。図書館にも相談できるよ、ということが優しく書いてあれば、一人でやりたいという人もいるかもしれないので、相談できるんだという安心感があっていいかなと思いました。

○事務局

おっしゃるとおりで、そこは考えていきたいと考えていきたいと思います。今は図書館では待機者がいらっしゃるような状況なので、本当はそういった方々がボランティアを求めているところとマッチングできるといいかなと思います。今、高齢者の方が読み聞かせをしたいという状況は伺っています。ホームページを作ることはすぐにできても、今はまだ提供先がないので、そこが難しいなと思っております。良い提案だと思いますので、私たちも今後検討してまいりたいと思います。

○委員

ボランティアさんも、高齢化が進んでいるということがありますので、次にどうなっていくのかなということは感じています。待機者がいるというのは素晴らしいことだと思いますが、長期的なことを考えたときに、継続してボランティアさんを育てていくということが大事だと思います。

○委員

私は小学校の読み聞かせサークルをしていますが、働いているお母さんが多いということで、どんどん人数が減っています。そういう待機の方がいるのであれば回していただきたいなというくらいです。高齢の方が活躍されるのはいいことだと思いますが、すごく楽しく活

動している、時間に余裕のあるお母さんたちもいるので、そこでお世話になった小学校や地域に貢献したい方のボランティアを活躍の場を増やしていてもいいのかなと思いました。確かに、高齢の方の読み聞かせというのも大切ですし、多世代交流としていいのかなと思いますが、少し若い世代からいうと、そういうところも考慮していただけるといいのかなと思いました。

○座長

このあたりで、次の「日本語を母語としない子どもへの読書支援」に進みたいと思います。ご意見はありますでしょうか。事務局からは、子ども日本語教室への支援というのが挙がっていますが、日本語を母語としない子どもへの支援としてはほかにどのようなことが考えられるでしょうか。

○副座長

以前、子供事業統括係長へ、リサイクルの絵本などに、英語などの一般的ではない言語の印刷をするなど、日本の中ではあまり本がない子どもたちのために何か提供できませんかと聞いたところ、著作権の問題があるから、という答えて、すごくがっかりしたことがありました。そういう問題が解決していかない中で、日本語ができない子どもたちのために何かをしてあげるといことはなかなか難しいと思います。例えば、インドの子どもたちがいたとすると、私から見るとインドの子どもと思っても、インドにはたくさんの言語があります。となると、その子たちのために一体なにができるのだろうと思います。著作権の問題というのはどうにもならないでしょうか。

○事務局

出版物の出版年や、原作の発行年にも影響してきますが、基本的には原著ないしはその権利承継者に対して権利料を払わないと、翻訳はできないということになります。

○座長

私見を申し上げたいのですが、日本語の教育支援と組み合わせるような形で、例えば私は在勤は練馬区ですが、家は中野区にありまして、中野区の公営住宅で日本語を子どもたちに教える、あるいは宿題の手伝いをするようなボランティアグループがあります。練馬区内でも公営住宅で取り組まれているボランティアグループなどと接点を設けて、図書貸出をするとか。また長期的な視点では、日本で生活していくのであれば、中学校に上がって言語がどんどん複雑になっていったときに学習についていけなくなるということもあるので、学習支援と組み合わせるような形で何らかのサポートができるといいのではないかと思います。

○委員

学校には自動翻訳機が2台あります。今、実際に光が丘地区には日本語を話せない生徒さ

んが増えている。本校の豊玉地区でも、英語じゃない言語の方々がいて、その翻訳機をフル活用しないと授業すら難しい。図書の時間で読み聞かせをするときに、図書室にも自動翻訳機があったらいいなと思いますし、教育委員会のほうでたくさん外国籍の方がいる学校には調査が入っていて、もっと翻訳機を渡していただけるという措置をしているんですけども、それとは別に、図書室にも常に翻訳機があったらいいのかなと思います。

また、来年度、電子書籍の導入が始まるということで選書をする事になっているので、その中で外国語の書籍を入れる、ということも案としてあると思います。

○委員

多言語での読み聞かせは一つの支援方法だと思いますが、文化や宗教の違いによって、例えば日本の昔話の内容が受け入れられにくい場合もあるようです。多言語で読むにあたっての勉強も必要かもしれません。多言語絵本の会 RAINBOW という団体が目黒区にあり、区とも連携されているため、そのような団体と連携してみてはいかがでしょうか。

○副座長

地域の中に、それぞれの国のコミュニティというのがあるかと思います。また、光が丘に文化交流ひろばという施設があって、日本語教室を行っていたりするので、そういったところにアプローチして、つながっていくのがよいのではないのでしょうか。

○座長

それでは、このあたりで④経済的な支援が必要な世帯の子どもへの読書支援に移りたいと思います。なにかご意見がありますか。

○委員

経済的な支援ということですが、そもそも図書館自体が、誰でも本を読むことができる場所というところではあるのではないのでしょうか。

○委員

そういった意味では、学校図書館もそうだといえると思います。そもそも特別な支援が必要なのでしょうか。

○事務局

経済的な支援が必要な世帯では、生活上の読書の優先順位が下がり、読書行為がなおざりにされる傾向にあります。本への関心を抱くに至っていないお子さんも多くおられると思われるため、計画の中で支援の取組を位置づけています。

○座長

体験格差というものがあります。例えば、夕食の会話の内容ひとつとっても、格差があるといえますので、そういった意味で、家庭の中での読書活動の支援は必要なのではないかと思います。

○副座長

私はずっと読み聞かせの活動をやってきました。関日奈子さんのお話で、紙芝居は、お芝居なのに、思い立ったら読めるし、お金もかからないし、いいよねという話を聞いたことがあります。そういう、小粒だけれどもたくさん出してあげられる経験が子どもたちの周りにいっぱいあったらいいなあと思っています。それで今でも私は紙芝居をやっているんですが、図書館でもいっぱいおはなし会があるのと同じように、児童館だとか地区区民館だとか学校だとか幼稚園だとか、そういうところで文化的なイベントがいつでも手軽にあると、経験の格差というのが少し縮まるのではないかと思います。

○座長

読書は旅行のようなものと皆さんおっしゃいますしね。本当に、家庭環境のあたりはずれの負担を子どもたちが受けなくても済むように、ボランティアの若い大学生が宿題を教えたり、読み聞かせをしたりとか、経済的に厳しいご両親に、あるいはご両親のいずれかがいらっしゃらなかったりして時間に余裕がないと家の中でも中々うまくいかなかったりするもので、なんとか社会全体の資源をうまく活用して、最近では親ガチャという言葉もありますけれども、少しでも当たりはずれなく高校進学に進めるサポートができるといいのではないかと思います。

○委員

ブックサンタといって、クリスマスに経済的な支援が必要な世帯で本を購入することができない方に対して、援助したい方がお金を出して本を届けるというのがあります。クリスマスとか誕生日に、本だと予算がかかるので、サンタクロースの格好をして読み聞かせをするとか。サンタクロースに読んでもらいたい家庭を募集して、応募した方に読んであげるといのは、お金がかからずにできることなのかなと思いました。

○座長

それでは、皆さんには引き続きこの4点について考えていただきつつ、ほかの資料についてご意見ご要望などがありましたらご意見をお願いいたします。

では、とりあえず次に進みます。次第3 読書に関するアンケートについて事務局からの説明をお願いします。

○事務局

読書に関するアンケートの実施についてご報告します。お手元の資料6および資料7をご覧ください。こちらのアンケートは、2月に開催した前回の本会議にて皆さんにご検討いただいた読書に関するアンケートについて、いただいたご意見を反映したものです。こちらは7月上旬から配布をして、区内の各小中学校に通う小学2年生および5年生、中学2年生を対象に実施しました。高校生については今後実施する予定です。資料6は、小学5年生向けのアンケートです。内容については、後ほどご確認ください。

実際のアンケートはお子さんたちが持っているタブレットを用いて、電子で回答をいただいております。資料7ですが、アンケートの結果のうち、いくつかの項目をピックアップして7月19日現在での集計結果をまとめたものです。掲載していない項目については、現在集計中です。まず上から順に、3学年併せて15,555人にアンケートを実施し、7月19日時点で回答数は9,113件で、回答率58.6%です。多くの学校に、夏休み前までに授業等でご回答いただけたようです。回答を見ていきますと、まず「本を読むのが好きですか」という質問に対しては「好き」「どちらかというところ好き」という回答が、小2が89%、小5が88%、中2が83%と、どの学年でも8割以上の生徒が読書に対して好意的であることがわかりました。また、どの学年も「好き」を選択した生徒が過半数を占めています。

次に、「本を読むのが好きなのはなぜですか」について、小2については「今まで知らなかった新しいことが学べる」が一番多く、小5、中2については「現実を忘れて本の世界に入り込める」が一番多い結果となりました。その他の理由として、「言葉や漢字を知ることができる」という学習につながる意見も複数ありました。

つぎに、「本を読むことが嫌いなのはなぜですか」についてです。小2、小5については「文字を読むのが苦手だから」が一番多く、「面倒だから」が次点に続きます。中二になると「面倒だから」が一番多く、これは成長とともに読書能力が向上するので、読むのが苦手だから嫌いという生徒は減りますが、ほかに興味があるものが増えるため、わざわざ読書をする時間をとるのが面倒、ということが理由になると考えます。

次に、一か月に何冊くらいの本を読むかという質問についてです。どの学年も、1冊～5冊が一番多い回答となりました。この質問における本とは漫画なども含みますので、次の「うち、漫画は何冊くらいですか。ただし、学習漫画は含みません」と聞いたところ、1冊～5冊が一番多い回答となりました。なお、漫画については0冊という回答も多かったため、漫画は読まないという方もいると思われます。ただ、最近は漫画をスマホアプリで読むということも予想されるため、漫画を0冊と回答しているとも考えられます。

最後に、「あなたは町の図書館を利用していますか」という質問についてです。小2は「毎日」から「1か月に1回くらい」の合計が半数を超えますが、小5は「一年のうち何回か」と「利用しない」の合計が58%、中2はその合計が76%と、学年が上がるにつれて図書館の利用頻度は下がるようです。

以上、簡単にではございますが、アンケートの集計結果報告でした。

○座長

アンケートについてと、その集計結果のご報告をいただきました。皆様、ご意見やご感想等をいただければと思います。

これは社会調査としては非常に優秀な回答率でして、6割というのは一般的なアンケート調査からいうと奇跡のような結果です。

○事務局

夏休み直前に図書館からお願いをしまして、学校の皆さんにご協力していただいた成果だと思います。基本的には7月19日までということをお願いをしています。各学校の先生方に感謝を申し上げないといけないと思っております。

○座長

なんというか、皆さん読書好きで安心しましたね。読書に対する態度そのものは非常にポジティブですね。

○委員

各学校の先生方に非常にご協力をいただきまして。各校長先生には回答をお願いしました。

○座長

ありがとうございます。一つ質問ですが、本の冊数を聞いているので、純粋な平均の冊数は計算していますか。あとは、最多冊数とか。

○事務局

平均についてはまだ計算していませんが、冊数については自由記述可能となっているため中には千とか一万とか、そういった数字を入れているお子さんもいらっしゃいました。そういうものも含めると、平均値がすごいことになってしまいます。

○座長

なるほど、子どもが回答するならではの、とんでもない回答があったということですね。ありがとうございます。

○委員

親目線からすると、「本を読むことが好きなのはなぜですか」で小学2年生の回答で最も多かったのは「今まで知らなかったことを知れるから」ですが、小学5年生以上になると「現実を忘れて本の世界に入り込むことができるから」となっていて、小学校低学年の子は知識があまりないので、本からいろんな新しいことを学んでいることがわかって、高学年に

なってくると、本を読む感覚が大人とあまり変わらなくなってくると思い、子どもの成長を感じました。とても興味深い回答だと思って見させていただきました。

○座長

確かに面白いですね。中2になると「時間つぶしになるから」というのもあり、中2は結構忙しいんですけども、時間つぶしもするのかなというところでは興味深いですね。

○委員

楽しみなことなんですが、アンケートの間6「まちの図書館での会話、おしゃべりについて」の回答はまだ資料の中に入っていないくて、この結果を早く知りたいなと思います。この第五次計画で一番うれしいと思っているのが、会話などを楽しめる時間やスペースについてというのが新規事業として入っていることです。このことは切実で、子どもは中学生になったとたんに行くところがないと言っています。図書館が静かにしろ、と言われるから行けないということで、この間 Coconeri（ココネリ）の区民協働交流センターに行ったところ、2時間しか使えないんですよ。ずっと空いていて穴場なんですけど、空いていても2時間を超えたらだめだといわれて、お金を使ってカフェでやったということで、中学生のしゃべれる居場所がなく「今日は集まる場所どうしよう」と探しているような状態なので、このことはとてもうれしく思っています。

○副座長

この間、開放図書館のカウンター当番に入っていた時に、中学生の女の子が、3月に卒業したばかりの子だったんですけども、入ってきまして。その日は図書館が4時まで開いていたのですが、5時までだと思っていたようで、4時から5時までどこにいたらいいの？ということでした。とりあえず4時まではいさせてあげて、地区区民館も児童館もあるよ、といったら、それはちょっと行きにくいと。図書館は？といったら、おしゃべりできないからいやだと。仕方がないので、中学生だから「このあたりで一番安くておしゃべりできるのはマックかなあ」なんて言ってしまったんですけども。中学生は居場所を求めています。中学生で、変なところにはいかないという気持ちの子たちは本当に困っていると思います。もし図書館で「このスペースだったら自由にしてもいいよ」と示していたら、子どもたちは行くと思います。

○座長

確かに、街角を見ている中学生たちは立ち話をしていますからね。自転車に乗ったまま、コンビニの前とかで。あれは居場所がないということだったんですね。

○副座長

その子たちは、一人はおそらく公立、そしてもう一人はおそらく私立の子だったんです

ね。学校が変わっても、小学校の時に仲が良かった友達とはまだ繋がっている。だからこそ、ここだったら大丈夫という地域の場所があれば、交流が続いていくと思います。

○座長

それでは、時間もオーバーしておりますので、いったん議題は以上ということで区切りをつけさせていただきます。本日の会議要録については、事務局が取りまとめ次第確認をいただいたうえで、練馬区ホームページ上で公開いたします。

本日は検討課題がそれぞれ大きな問題でしたので、もし言い忘れた、あるいは思いついたことがございましたら、事務局にでもメールでお伝えいただいて、全員にメールで回覧いただくようなことでも可能かなと思いますが、それでよろしいでしょうか。

○事務局

はい、問題ありません。

○座長

もし、委員の皆様で補足したいことがございましたら、事務局へご連絡いただければと思います。

では、最後に事務局から連絡事項をお願いいたします。

○事務局

第四回の会議については、11月ごろを予定しております。

○座長

それでは、以上で第12期第三回練馬区子ども読書活動推進会議を終了いたします。ありがとうございました。

●会議後の意見補足内容

○副座長

基本目標の文言について、一文お送り致します。

「子どもたちがそれぞれの成長過程の中で、本に親しみ、夢や希望を持ち、未来を切り拓く力を育めるよう、読書環境の整備を進めます。」

○副座長

1 「基本方針」について

基本方針の①～③のうち、①は「子ども」が主語と思われる文章、②③は「練馬区」が主語と思われる文章にわかれているため、統一してみても、と思いました。

具体的には、①の文章を例えば「子どもが自ら学ぶ喜びを知り、探求する姿勢を獲得することの支援」とすると、支援をするのは練馬区なので主語が練馬区になると思いますが、いかがでしょうか。

2 「基本目標」について

時間内に答えが出なかった項目ですが、皆様から出ていた意見や質問などを反映させ、かつ原文のニュアンスを大きく変えないようにするとしたら、例えば「子どもそれぞれの発達や生活様式に応じた読書環境を整備することで、子どもたちが本に親しみ、読書を通じて夢や希望を持ち、未来を切り開く力を育めるような地域をつくっていく」としてはいかがでしょうか。

「発達」の部分は原文では「発達段階」でしたが、「段階」としてしまうとかなり意味が限定的になるため、「発達」にすることで他の委員の方がおっしゃった「成長」や、発達の遅れ、偏りをはじめとする「発達の多様性」も包含する内容になるかと思います。

「生活様式」については、もう少し柔らかい表現の方がよければ「生活スタイル」「ライフスタイル」という言い方もできるかと思います。

「練馬区」が主語であることをより明確にするために、最後に「地域をつくっていく」という言葉を入れてみました。